

特別展 オタケ・インパクト  
—越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム—

Special Exhibition The OTAKE Impact  
Japanese-Style Anarchism of the Three OTAKE Brothers —Etsudo, Chikuha, and Kokkan



2024年10月19日(土) - 12月15日(日)

## 《展覧会概要》

### はじめまして、尾竹三兄弟

新潟県に生まれた尾竹越堂（おたけ・えつどう 1868～1931）、竹坡（ちくは 1878～1936）、国観（こっかん 1880～1945）の三兄弟は、明治から昭和にかけて文部省美術展覧会をはじめとした様々な展覧会で成功を収め、まさに「展覧会芸術の申し子」として近代日本画史にその名を残しました。しかしながら、竹坡は筆頭に実験的ともいえるラディカルな表現を試み、また時にエキセントリックな生き方を貫いた尾竹三兄弟は毀誉褒貶にさらされ、美術史の語りから零れ落ちていきました。展覧会制度の光と影のなかで、新しい日本画の可能性を示した彼らの革新的かつ魅力に溢れる作品は、きっと今の私たちの眼にも新鮮に映るはずです。

本展は、東京で尾竹三兄弟を紹介する初めての展覧会です。彼らの重要作をはじめ、多数の新出作品や未公開資料から、知られざる尾竹三兄弟の人と作品を紹介します。そして展覧会制度のなかで躍動した三兄弟の作品を一堂に会すことで、「展覧会芸術」の到達点の一つをご覧くださいませ。

## 《本展のみどころ》

### 1. 知られざる尾竹三兄弟の全貌を紹介

東京初となる尾竹三兄弟の展覧会として、彼らの代表作が一堂に会します。知られざる尾竹三兄弟の革新性と魅力を、展覧会出品作を中心とした彼らの重要作から紹介します。

### 2. 新出資料・初公開作品を多数出品

明治43年に国画玉成会に出品するも、会長の岡倉覚三と衝突したためにすぐさま撤去された幻の作品《絵踏》が初めて公開されます。また今回の調査で新たに確認された作品や東京初公開の作品も多数あり！

### 3. 岡倉覚三（天心）と対立した三兄弟の画業を検証し、新しく多様な美術史の水脈を紹介

岡倉を中心とした従来の美術史では語られない、尾竹三兄弟のエキセントリックな活動と作品を紹介します。

## 《基本情報》

展覧会名	特別展 オタケ・インパクトー越堂・竹坡・国観、尾竹三兄弟の日本画アナキズム The OTAKE Impact: Japanese-Style Anarchism of the Three OTAKE Brothers -Etsudo, Chikuha, and Kokkan
会 期	2024年10月19日（土）～12月15日（日） （前期）10月19日（土）～11月17日（日）（後期）11月19日（火）～12月15日（日）
開館時間	11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで
休 館 日	月曜日、11月5日（火）※11/4（月・休）は開館
入 館 料	一般1,200円(1,000円)、高大生800円(700円)、中学生以下無料 ※20名様以上の団体は()内の割引料金 ※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料
会 場	泉屋博古館東京 〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1 TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル) <a href="https://sen-oku.or.jp/tokyo/">https://sen-oku.or.jp/tokyo/</a>
主 催	公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社
後 援	港区教育委員会（予定）
助 成	芸術文化振興基金

## 《作家略歴》

### 尾竹越堂（おたけ・えつどう、1868～1931）

新潟生れ。幼くして上京し、四代歌川国政に学んだ。富山に移り、売薬版画や新聞の挿絵、絵馬などに筆を揮った。富山の大火に焼き出されて大阪に出て、引札などの下絵を担った。また弟たちの全国公募展での活躍を受け自身も上京、43歳で遅咲きの文展デビューを果たしている。長女に婦人運動家で富本憲吉と結婚した尾竹一枝がいる。

### 尾竹竹坡（おたけ・ちくは、1878～1936）

新潟に生まれ、4歳で笹田雲石に南画を学び、のち上京して川端玉章に入門。一時は日本美術院の研究会に参加するなど将来を嘱望されるが、国画玉成会第1回展で岡倉覚三（天心）と対立する。その後は官展を中心に活躍し、大正期には画塾展（八火社）で革新的な作品を次々と発表した。文展で落選したことがきっかけで衆議院にも立候補したことがある。

### 尾竹国観（おたけ・こっかん、1880～1945）

新潟生れ。はじめ南画家・笹田雲石に学び、のちに小堀鞆音に師事し歴史画を学ぶ。12歳の時に児童画コンクールで1等賞となり、「少年画工」として全国児童誌の挿絵を担当した。歴史に取材した作品を得意とし、第3回文展で2等賞を受賞するなど、文展の花形作家として活躍。



写真左より  
竹坡・越堂・国観

## 《展示構成》（予定）

### 第1章 オタケ登場 一見知らぬ地方の少年達を羨まずにはいられなかった

新潟で紺屋（染物屋）を営む家に生まれた長男・熊太郎（越堂）、三男・染吉（竹坡）、そして四男・亀吉（国観）は、「国石」と号して画事に親しんだ父・倉松に絵の手ほどきを受けながら育てられた。その後越堂は幼くして東京へ出て四代歌川国政に学んだと伝えられ、また明治15年には九州の南画家・笹田雲石が食客として尾竹家に逗留し、竹坡や国観はこの雲石から作画の基礎を学び、それぞれ号を授かっている。

明治22年頃に富山へと移った越堂は、最盛期を迎えていた売薬版画の下絵や新聞の挿絵、絵馬等を描いて家計を助けることになった。竹坡と国観も兄を追って富山に移り、売薬版画を代表する絵師となった兄を支えるために挿絵や絵馬の制作に従事しているが、他方で日本美術協会展や内国勧業博覧会に入選するなど早熟ぶりを見せている。さらに国観は12歳のとき児童画コンクールで1等賞となり、竹坡とともに全国児童誌の挿絵を担当する「少年画工」として広く知られた。その様子について鍋木清方は「見知らぬ地方の少年達を羨まずにはいられなかった」と伝えている。その後、本格的な絵画学習を志した竹坡と国観は、明治26年に国観が上京して歴史画の大家として知られた小堀鞆音に入門し、その3年後には竹坡が上京して川端玉章に師事することになった。

物語の一場面を端的かつ効果的に描き出す挿絵の経験を下地に、竹坡は四条派由来の写生表現を重ね、また国観は鞆音に学んだ堅牢かつドラマチックな歴史画の表現を追究し、それぞれ展覧会で受賞を重ねるなど早くから頭角を現している。

本章では3兄弟の助走時期の作品を中心に紹介する。



尾竹越堂  
《役者見立 檀浦兜軍記す・阿古屋琴セメの段》1面  
富山市売薬資料館





尾竹竹坡・国観  
《楠木正成母子図・新年突羽根婦人図》2幅  
福田美術館蔵



尾竹竹坡《母と子（真心）》1幅  
明治37年 雪梁舎美術館  
セントルイス万博博覧会出品作



尾竹国観《人物図》1幅  
明治30年代  
泉屋博古館東京

## 第2章 躍進するオタケ — 「文展は広告場」

明治40年に文部省美術展覧会が創立されると、その第3回文展出品作の国観《油断》が最高賞を授賞、竹坡も翌年の第4回展出品の《おとづれ》が二等賞を受賞するなど、一躍人気作家の仲間入りを果たしている。そして明治32年の富山大火により大阪に移っていた越堂もまた弟たちの活躍に刺激を受けて上京し、43歳で遅咲きの文展デビューを飾っている。

竹坡が「文展は広告場」と明言するように、横山大観や下村観山ら東京美術学校を卒業した「学校派」に対して、三兄弟は地方から立身出世を目指して上京し、明治に到来した展覧会システムを最大限に利用して画名を高めていった。その意味において彼らはまさに「展覧会芸術の申し子」であり、特に竹坡は展覧会ごとにその作風を変え、大衆の人気を集めて官展の花形作家のひとりとなっていく。一方で、無鑑査となった第6回文展では、一人で6曲2双を2点も出品し、会場を占拠するような様相を呈した為、大きな批判を集め鬱蹙を買っている。

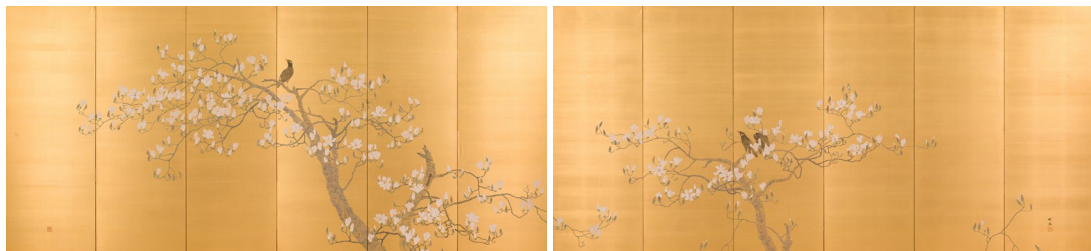
本章では文展や異画会の出品作を中心に、富山時代に培われた挿絵画家としてのさまざまな画題や表現への高い対応力（状況に応じた作画）、確かな技術に裏打ちされた瞬発力を武器に、尾竹三兄弟の名を画壇に轟かせていく様子を紹介する。



尾竹国観《油断》  
6曲1双 明治42年  
東京国立近代美術館  
第3回文展出品作

★初公開

尾竹竹坡《九冠鳥》  
6曲1双 明治45年  
個人蔵  
第12回異画会出品作



★初公開

尾竹越堂《漁樵問答》6曲1双  
大正5年 個人蔵  
第10回文展出品作



## トピック：国観作《絵踏》の発見

本作はキリシタンの絵踏の場面を描いたもの。乳飲み子から老夫婦、武士に農民、宣教師と思われる白人、中国人物まで、総勢41名の群像が描かれる。本作は明治41（1908）年10月15日に開会した国画玉成会主催の日本絵画展覧会（於竹之台陳列館）へ出品された。しかしながら翌日開催の懇親会において、審査員の選からもれた兄・竹坡が岡倉覚三（天心）を面責したため、竹坡は除名となり、国観も兄に従い退会することになった。そして18日には展示中だった同作を会場より撤去したいわくつきの作品。

本作は2022年に国観のご遺族より当館へご寄贈いただいたが、寄贈時は料絹に裏打ちはなく完全なまくり状態であり、巻いた状態で保管されていた。国画玉成会出品時は裏打ちをせずに仮額へ直接張った状態で掲出されたと考えられ、当時の展示状況を伝える点においても貴重。その後、修理と表装をして本展において初公開となった。



★初公開 尾竹国観《絵踏》1面 明治41年 泉屋博古館東京 国画玉成会展覧会出品作（撤去）



修理前

## 第3章 オタケ・アヴァンギャルド—「捲土重来の勢を以て爆発」

明治末以降、尾竹三兄弟は異画会や文展を基軸に破竹の勢いで活躍の幅を広げていった。また竹坡・国観兄弟は日本美術院の研究会に参加するなど、日本画の革新運動を主導した岡倉覚三（天心）にも将来を嘱望されていたが、明治41年に開催された国画玉成会において審査員の選出をめぐる対立する。以降、日本美術院とは道を分かち文展での活躍を期すものの、大正2年開催の第7回文展において3兄弟はともに落選の憂き目に遭っている。当然のごとくこの審査を不服とした三兄弟は、落選作を集めた「文展落選展覧会」を文展の会期に合わせて開催して反発、さらに竹坡は大正4年に衆議院議員の総選挙に立候補し、美術行政制度改革を謳うなど自身の主張を社会へ発信していった。

この時期に三兄弟の主な発表の場となったのは門下生たちを集めた画塾展だった。明治45年に竹坡の門下生たちによって発足した「八火会」は同年8月に展覧会を開催し、その後越堂と国観も加わり「八華社」「八火社」と改称して展覧会を開催している。特に竹坡は大正9年から始まる八火社展において総出品作79点のうち59点を一人で描き上げ、この時期に新しく日本へともたらされた未来派から着想を得た抽象的な作品など、従来の日本画から逸脱する新しい感覚をもった画風を展開している。また画題も得意とした歴史故実取材したテーマから、労働や抽象的なテーマへとシフトしていった。

本章では、八火社に出品された前衛的な作品から、当時「数年来の忍黙不平がここに捲土重来の勢を以て爆発している」と評され、鬱憤を晴らすように奮闘する尾竹三兄弟の姿を紹介する。



尾竹国観  
《大久保彦左衛門・松平長四郎》  
2幅  
大正2年 知足美術館  
第1回八華社出品作

★初公開

尾竹竹坡  
《大漁図（漁へ行け）》1幅  
大正9年 個人蔵  
第1回八火社展出品作





尾竹竹坡《月の潤い・太陽の熱・星の冷え》3幅  
大正9年 宮城県美術館 第1回八火社展出品作



★初公開  
尾竹竹坡《競ひ（決勝点）》1幅  
大正9年 個人蔵 第1回八火社展出品作



尾竹竹坡《葵》1幅  
大正10年 個人蔵  
第2回八火社展出品作

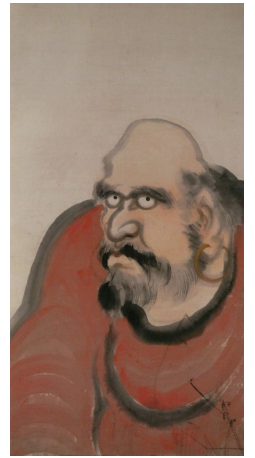
## 第4章 オタケのその後

一時は日本画革新運動に身を投じながらも、日本美術院との確執や文展の落選など、画壇の構図から弾かれ、歴史の語りから零れ落ちていった尾竹三兄弟。しかしながら展覧会制度に翻弄されながらも、大正期には生来の反骨精神と高い画力を糧に新たな日本画の可能性を示していった。昭和期の竹坡と国観は官展へ振り返り咲きを目指してそれぞれ作風の展開を図っている。大正期のような剥きだしの熱量は抑えられ、竹坡は写実と理知的な構成へ、国観は堅牢な歴史画など、むしろ原点回帰とその洗練へと向かっている。一方で竹坡は第4回帝展において、日本画のみならず彫刻や洋画の作品を同時に出品するなど、やはり既存の枠組みには収まらない奔放さを示している。長兄の越堂は次第に展覧会から距離を置き、地元新潟の注文に応じて筆を振いながら、昭和2年の東京都美術館の設立ではリーダーシップを発揮するなど、美術界の発展に力を尽くしている。

本章では、晩年の展覧会出品作を中心に、それぞれの展開を紹介する。衆議院の落選以降、借金のために濫作に陥ったと言われる尾竹三兄弟だが、それぞれが新しい画境を求めて煩悶する様子をご覧ください。



尾竹竹坡《大地円》3面 大正14年 新潟県立近代美術館 第6回帝展出品作



尾竹越堂《赤達磨》1幅  
個人蔵



尾竹国観《天の岩戸・常闇》2曲1双  
昭和12年 雪梁舎美術館 第1回新文展出品作（「常闇」のみ）



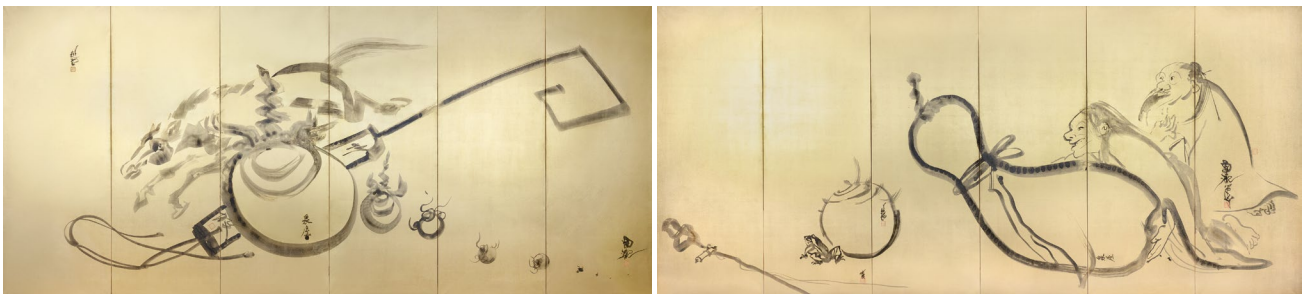
★初公開  
尾竹竹坡  
《山つつじに双雉図》  
1幅 昭和6年 個人蔵  
米国日本画展覧会

## 第5章 オタケと住友（特集）

住友家第15代住友吉左衛門友純（号春翠）は、明治末から大正にかけて尾竹三兄弟と親交を結んだ。明治42年（1910）に鹿子木孟郎の紹介で竹坡の第3回文展出品作《茸狩》を購入、その翌年にも竹坡の第4回文展出品作《棟木》を購入している。大正期には竹坡の巽画会の出品作《九冠鳥》や、同じく巽画会に出品された国観《助六》と越堂《花筏》、そして第8回文展に出品された越堂《さつき頃》など、次々と大作を購入している。

また春翠は明治43年12月に大阪の料理店灘萬楼において住友社員の慰労会を開催し、当時大阪に居を構えていた越堂と、兄のもとに滞在していた竹坡と国観を招いている。宴席では三兄弟が即興で筆を揮い、揮毫した24点をくじ引きで参加者に分け、さらには清遊の記録として席画の画像を掲載した小冊子まで作成するなど、盛況な会の様子を伝えている。

このように明治42年より始まった交流は春翠が亡くなる大正15年まで続き、昭和2年には越堂から白衣観音の軸が春翠の仏前として住友家に届けられた。両者は作品購入を機に交流がはじまったものの、春翠と三兄弟の合作が今に遺されているように、杓子定期的な注文主と制作者の越えた関係性が見えてくる。



★初公開

尾竹越堂・竹坡・国観《席画合作屏風》6曲1双  
明治後期～大正時代 泉屋博古館東京

### 《ラーニング・プログラム》

※全て当日の観覧券が必要になります

※各プログラムの詳細、お申込みについては当館ウェブサイトをご覧ください。

#### 1 こども鑑賞会（要予約・参加費無料）＊同伴者は要観覧券。11月3日（日・祝） 10：15～11：00

〔講師〕 椎野晃史（泉屋博古館東京 主任学芸員）

〔対象〕 4歳～小学6年生（保護者同伴のこと）〔定員〕 15組

#### 2 シンポジウム「尾竹三兄弟を解き放つ」（要予約・要観覧券）11月16日（土）14：00～16：30

〔基調講演〕 菊屋吉生氏（山口大学名誉教授）

〔登壇者〕 坂森幹浩氏（富山市郷土博物館長）、加藤敦子氏（敦賀市立博物館学芸員）、椎野晃史（泉屋博古館東京 主任学芸員）

〔モデレーター〕 野地耕一郎（泉屋博古館東京館長）〔定員〕 50名

#### 3 ワークショップ「触れる、日本画」（要予約・要観覧券・要参加費）11月30日（土）13：30～15：30

〔講師〕 長澤耕平氏（東京藝術大学非常勤講師）

〔参加費〕 8,000円 〔定員〕 15名 〔内容〕 日本画の画材を実際に体験するワークショップ。

#### 4 〈アートwith〉レクチャー「美術司書の仕事」（要予約・要観覧券・要参加費）12月6日（金）17：30～18：30

〔講師〕 橘川英規氏（東京文化財研究所 近・現代視覚芸術研究室長）〔参加料〕 500円 〔定員〕 50名

#### 5 記念講演会「オタケ三兄弟の画業について」（仮）（要予約・要観覧券）12月7日（土）14：00～15：30

〔講師〕 荒井経氏（東京藝術大学教授）〔定員〕 50名

#### 6 スライドトーク（予約不要・要観覧券） 10月26日（土）、11月9日（土） 各14:00～15:00

〔講師〕 椎野晃史（泉屋博古館東京 主任学芸員）〔定員〕 50名 ※当日11時より整理券配布

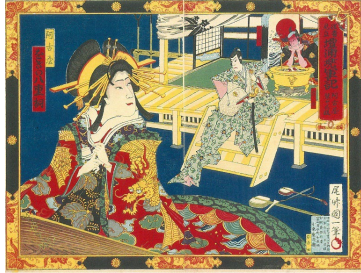


《貸出可能画像・キャプション一覧》

※屏風片隻使用時は（右隻）（左隻）  
部分図使用時は（部分）の表記をお願いします



尾竹越堂 《漁樵問答》  
大正5年 個人蔵



尾竹越堂  
《役者見立 檀浦兜軍記す・  
阿古屋琴セメの段》  
富山市売薬資料館



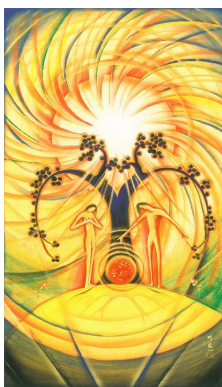
尾竹国観 《絵踏》  
明治41年  
泉屋博古館東京



尾竹国観 《油断》  
明治42年  
東京国立近代美術館



尾竹竹坡 《九冠鳥》  
明治45年 個人蔵



尾竹竹坡 《月の潤い・太陽の熱・星の冷え》  
大正9年 宮城県美術館



尾竹竹坡  
《大漁図(漁へ行け)》  
大正9年 個人蔵

(部分)

(全図)

《お問い合わせ先》

泉屋博古館東京 広報担当：橋本旦子 展覧会担当：椎野晃史(泉屋博古館東京 主任学芸員)

TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137 E-mail: [pr-tokyo@sen-oku.or.jp](mailto:pr-tokyo@sen-oku.or.jp)